私説・沖田総司

三好 徹

中央公論社

私説・沖田総司

定価五〇〇円

昭和四十七年五月一日印刷
昭和四十七年五月十日発行

著者　三好徹
発行者　山越豊
印刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
©一九七二　検印廃止

目次

私説・沖田総司　5
人斬り彦斎　53
暗殺始末
参議暗殺
あとがき　221

表紙絵および扉カット　上柳美与

ブックデザイン　小池玲子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

小説集

私説・沖田総司

私説・沖田総司

推理小説のトリックの一項に「意外な兇器」というのがある。乱歩の「類別トリック集成」には、五十八例が挙げられている。

ふつう、兇器といえば、ピストルや刃物を想像するだろうが、それでは意外とはいえない。そこで多くのトリックが考えられてきたわけだが、簡単な例を紹介すれば、氷である。氷の鋭い破片で刺殺すれば、死体が発見されたときには、兇器はあとかたもなく溶けてしまっている。はて、兇器は何だろう？　と捜査陣は大いに頭を悩ますことになる。

もう少し複雑になると、動物を兇器として使う殺人が考え出された。たとえば、ライオンにクシャミする薬をあたえ、ライオン使いが口の中に頭を入れる芸をみせているさい、噛み殺させてしまう。この場合、ライオンには殺意というべきものはない。つまり、兇器にしかすぎないわけである。

これを発展させたものに、死体による殺人がある。死人の手にピストルを握らせておき、死後硬直によってユビに力が入り、引金がひかれて、そばにいた被害者にあたるのだ。突飛な着想であるが、じっさいにそのようなことが起こった例を、ヴァン・ダインは「ケンネル殺人事件」のなかで書いている。乱歩はこれを「意外な犯人」の項に入れて紹介しているが、この場合、死人は犯人というよりも、兇器として使われたとみるべきだろう。

動物にせよ死人にせよ、いずれの場合においても、それは人間ではない。生きている人間である

限り、意思というものがあり、ものとしての兇器にはなり得ない。それが常識である。にもかかわらず、この常識に挑戦したのがエラリー・クイーンで、かれは、生きている人間を「兇器」として利用する作品を書いている。「生者と死者と」という長編がそれである。

十年以上も前にこの作品を読んだとき、わたしは、奇想天外なことを考えるものだな、と感じたのをおぼえている。しかし、時間がたつにつれて忘れていた。

それを想い出させたのは、ケネディ事件であった。真犯人とされている男は、じつは兇器として使われたにすぎないのではあるまいかという疑念が生まれ、と同時に、右のクイーンの作品を想い出したのである。

推理小説での話なら、生身(なまみ)の人間を兇器として使うのも、ひとつの思いつきとして許されるが、これが現実に起こったらどんなものだろうか。だが、われわれの周囲や過去をさかのぼって考えてみると、そういう実例は必ずしも少なくない……。どころか、政治的なテロ事件の大半はこの範疇に入るだろう。

百年前の維新風雲のころを想えば、その実例に不足はない。河上彦斎(げんさい)、田中新兵衛、岡田以蔵らがそうである。かれらは、いずれも申し合わせたように、その名前の上に「人斬り」という称を冠せられた。そしてまた、一致して最期は悲惨をきわめている。いいかえれば、兇器としての役が終ってしまうと、その人生もまた終っている。

また、かれらはすべて勤王派に属しているが、人斬りは佐幕派にもいた。集団としての新選組がそうだし、その集団のなかにも個人として、たとえば人斬り鍬次郎といわれた大石鍬次郎のように、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

兇器だった人間が存在した。この大石の末路もまた、集団の指揮者であった近藤と同じく、斬首であった。

この新選組のなかで、一番の剣士といえば、沖田総司とされている。幼少のころからかれは天才的な剣の使い手だったことになっているが、ありようは、どうであったろうか。

幕末のころは、数多くの剣客を輩出している。そのなかで、実戦経験の豊かさにおいて、ということは相手を斬った数において、総司ほどの人物はまれであろう。新選組結成の初期のころは、近藤勇や土方歳三もかなり人を斬っているが、隊士の増加にともない、かつ新選組の地位が高まるにつれて、実戦の場に加わることは少なくなった。その点で、総司は、最後まで剣の術者として生きた。が、かれは本当に強かったか。

総司の場合、新選組生き残りの人びとによって、かれが天才的な剣士だった、といい伝えられている。ことさらに異を唱えるつもりはないのだが、あとで触れることと関連するので、まずはじめに、かれが必ずしもそうではなかったのではあるまいかという疑問から出発したい。

1

沖田総司が生まれて初めて人を斬ったのは文久三年七月十五日である。新選組が正式に発足したのは、この年の三月であり、隊士の数もまだ五十名程度のころであった。

当時の事実上の隊長は、芹沢鴨であった。局長と称するリーダーは、ほかに芹沢の親友の新見錦と近藤がいたが、芹沢が筆頭局長となっていた。

もともとは常陸芹沢村の郷士で、本名は木村継次。神道無念流の達人であった。色白で背は高く、尽忠報国之士芹沢鴨と彫った三百匁の大鉄扇をつねに所持していた。

どちらかといえば、この鉄扇でもわかるように単純勁烈な人物だったが、ひとつだけ、異常なところがあった。酔うと、狂人のようになるのである。

つまり酒乱である。そして、無類の酒好きでいつも酔っていたから、いつも狂人のようだったことになる。

この七月十五日のころ、新選組は大阪へ出張していた。宿舎は天満八軒屋の京屋。旧暦の七月だから残暑のきびしいころである。

「こう暑くてはかなわん。川涼みとしゃれようではないか」

と芹沢がいい出した。

川涼みというのは、いわば言葉のあやで暑気ばらいに、北の新地あたりで遊ぼうということだ。

大将がそういうのだから、反対するものはいない。のちには潤沢になった組の財政も、このころは会津藩預りになったとはいえ、さほど豊かなころではない。京都では、新選組というよりも、駐在している壬生の地名からきた壬生浪の方が、とおりがよいくらいで、総司ら一般隊士は自由に遊興するほどの金を持っていなかった。芹沢の音頭とりに応じて山南敬介、永倉新八、平山五郎、斎藤一、島田魁、野口健司、それに総司を加えて計八人がくり出した。近藤や土方らは、京屋に居残った。肚のなかでは、総司らが誘いに応じたのを苦々しく想っていたろうが、口には出さなかった。

新選組は、男の世界である。芹沢が筆頭局長になったのは、会津藩に顔がきいたからという理由

もあったろうが、なんといってもその実力がモノをいっている。剣の術者として三流、四流であったならば、局長にはなれなかったにちがいない。なにしろ、この組織は、浪人の集団なのである。家柄は関係ない。有無をいわさぬ実力がなければ、局長であることは難いであろう。近藤は、芹沢とは仲がよくないが、総司や山南、永倉といったかれのグループの参加を制止することはできなかった。

芹沢らは、舟を仕立てて淀川を下った。途中で斎藤が腹痛を起こした。

「なに、腹が痛いと？　酒でものめばすぐになおるさ」

芹沢にとっては、他人の腹痛さえも、飲酒の口実になる。舟を岸に着けさせて、新地をめざした。岸から土手へぞろぞろとあがって行くと、その行手に、ひとりの巨漢が立ちはだかっていた。大阪相撲の大関小野川喜三郎の弟子である。酒にでも酔っていたのか、前に立って上ってくる芹沢をよけようともしない。

「どけ！　そこの木偶坊」

と芹沢がどなった。

「なんや、えらそうに」

と相撲取りがやりかえした。

人は見かけによらぬもの、という理を心得ていなかったのが、この巨漢の運のなさであった。一行のうち芹沢ら四人は稽古着に袴をつけて、脇差を帯びただけの軽装だったことも作用したにちがいない。素浪人の集りくらいに考えて、そういいかえしたのであろう。芹沢の眼が凄じく光った。

「馬鹿者！」
と叫んだのが気合いで、抜く手もみせずに一刀のもとに斬ってしまった。
乱暴を通りこしているが、当時の大阪力士は勤王好きであり、芹沢もその噂は聞き知っていた。そんなことも、この無法の下地になったかもしれない。
そういう事情は別として、この芹沢の手練は瞠目に値した。うしろにいた総司は、一部始終を見、芹沢の斬り口の鮮かさを見て、神道無念流免許が決して口先だけのものではないことを知った。
「先生、お見事なものですな」
といったのは、芹沢の乾分の野口である。
「うむ」
芹沢はおだてに弱い。
「諸君、北の新地が近い。そこへ急ごう」
と脇差の血のりをぬぐって歩き出した。
そこへ、もうひとり相撲取りが現われた。もしかすると、芹沢に斬り殺された男と連れ立っていたのかもしれない。
またもや衝突しかかったが、こんどは、山南らが芹沢を抑えて、刀をぬくまでには至らなかった。山南は仙台の出身、北辰一刀流の免許であるが、温和な気質の持主であった。当時の肩書は副長である。芹沢もいうことをきいて、この相撲取りは見のがした。おそらく、争闘よりも、酒や女に心がとんでいたのであろう。

一行は、北の新地の住吉楼という店へあがった。すでに夕刻であった。そこへ、五、六十人の相撲取りが押しかけてきた。山南のおかげで助かった男が、仲間の死体を見つけ、尾行して住吉楼に登楼したのをつきとめてから、部屋のものに報告したらしい。仲間の仇討ちだというわけで、手に手に樫の八角棒を持っていた。

「なに？　相撲のやつらがきたと？」

芹沢は舌なめずりをするようにいった。

大阪出張の目的は、将軍の警護にあったのだが、そんなことはもう念頭にはなくなっている。芹沢は、脇差をぬくなり、どどッと二階をかけ下り、仁王の群れのような巨漢たちのなかにとびこんで行った。山南らも、芹沢を放っておくわけにはいかなかった。事の理非はどうあれ、ここで芹沢を見殺しにしては、新選組に帰ってから、いいわけができぬ。それぞれ抜刀して、乱闘に加わった。

総司はこのとき初めて人を斬るという体験をもった。いっしょにいた永倉の想い出話によると、刀を風車のように振りまわして敵を悩ました、というが、いささか講談調にすぎて、実際には必ずしもそうではなかったろう。ともあれ、総司にとっては、これが生まれて初めての実戦で、この乱闘の間にかれ自身もこめかみに擦り傷を負った。ほかに、平山は胸を打たれたし、永倉は仲間の島田のふるった刀で左腕に傷を負った。張本人の芹沢は、返り血を全身に浴びて血まみれになったものの、擦り傷ひとつ負わなかった。

これにひきかえ、相撲がわの被害は甚大である。即死五名、重軽傷十六名。真剣に樫棒の差はあるにしても、その差がひどすぎる。つまりは、剣の心得の有無がこの開きになったものであろう。

それにしても、芹沢の腕の冴えは凄じいの一語につきる。この時点では、新選組随一の使い手はかれだったように思われる。

その芹沢が総司の手にかかって殺された。

2

文久三年九月十八日は、朝から雨だった。この日、島原の角屋（すみや）で新選組の宴会がひらかれた。

芹沢は夜十時ごろ、乾分の平山五郎、平間重助を連れて、駕籠（かご）に揺られて宿舎の郷士八木源之丞屋敷に戻った。

この八木屋敷は、いまの下京区坊城通にあり、代々源之丞を名乗っている。通りをへだてた角が同じく郷士前川荘司（まえがわと読む）の屋敷で、こちらはすでに代がかわり、現在は田野新太郎氏の所有である。両屋敷とも多少の改造はほどこされているが、全体としては、当時のままとさして変りはない。わたしは、冬のある日、まず八木屋敷をたずねて、若主人に案内をこうた。

門を入った右手が母屋であった。玄関の式台を上ると、すぐに四畳半があり、天井から何本かの槍の身の方だけが吊り下げられている。一見して、よほど古いものとわかる。

若主人の説明によれば、それは戦国時代のもので、八木家は信長と争った朝倉の家系であるという。

「朝倉に仕えたことのある明智光秀が保護してくれて、領地の八木にかくまってくれたんですね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook